
庭文庫店主講演・トークショーのご案内

このたびは、庭文庫に興味を持ってくださり、ありがとうございます。2018年4月にオープンした庭文庫は、まだ手探りの中で運営をしていますが、もし講演やトークショーのご依頼の場合は、下記をご覧くださいの上でお申込みください。

庭文庫店主について

百瀬 実希（旧姓：中田 実希）

1990年沖縄生まれ。大阪市立大学卒業後、東京のイベント企画会社勤務。2016年岐阜へIターン。2016年10月恵那市地域おこし協力隊着任。空き家バンクや移住相談などを担当。協力隊の業務とは別に、2017年1月より出張古本屋「庭文庫」スタート。2018年4月より実店舗にて古本屋「庭文庫」オープン。庭文庫の広報・イベント担当。

※基本的に講演・トークショーは百瀬 実希が対応いたします。

百瀬 雄太

1988年東京生まれ、岐阜県恵那育ち。恵那高校を卒業後、慶應義塾大学総合政策学部入学、卒業。大学在学中は地域活性化プロジェクトの実践研究を行う。音楽家としては、舞台音楽監督・作曲を担当。2015年3月岐阜へUターン。2017年1月より出張古本屋「庭文庫」を百瀬実希とともにスタート。2018年4月より実店舗にて古本屋「庭文庫」オープン。庭文庫の店舗運営担当。

講演タイトル一覧

- ・地方で、好き！をカタチにする。古民家 × 場のはじめ方。（対象：地域で新しいことをはじめたい方）
- ・3万円から始めるローカルビジネス～できるところからはじめる方法～（対象：地域で新しいビジネスをはじめたい方）
- ・ローカルに根付いて仕事をつくる（対象：地域で新しいビジネスをはじめたい方）
- ・地方とアートの可能性。無名が開く新しいローカル（百瀬雄太対応）

※一例です。ご希望やご要望にあわせて内容の変更は可能です。

※庭文庫ができるまで～現在までをまとめた資料をお渡し致します。

講演・トークショー実績

百瀬 実希（旧姓：中田 実希）

・「中津川・瑞浪・恵那 田舎暮らしセミナー」内トークショー「田舎暮らしは、HAPPY？」登壇（2017年9月16日名古屋開催・十六銀行主催）

・「地方で、好き！をカタチにする」登壇（2018年3月4日岐阜県開催・恵那暮らしサポートセンター主催）

・「地方で、好き！をカタチにする。古民家 × 場のはじめ方／古本屋「庭文庫」 × ゲストハウス「ソラノイエ」」登壇（2018年5月19日東京開催・岐阜県主催）

・「ローカルに根付いて仕事をつくる | GIFU MEME-ギフミーム-」（2018年7月15日名古屋・GIFU MEME 主催）

「地方で、好き！をカタチにする。古民家 × 場のはじめ方／古本屋「庭文庫」 × 「やわいや」」登壇（2018年8月26日名古屋開催・岐阜県主催）

百瀬 雄太

多摩美術大学 情報デザイン学科メディア芸術コース卒業制作展 「HERE」トークショー登壇（2017年3月6日横浜開催・主催 多摩美術大学 情報デザイン学科メディア芸術コース卒）

講演料

3万円（交通費・遠方の場合は宿泊費別途）

※庭文庫店主ふたりでの出演をご希望の場合は、ご相談ください

お申込みについて

以下の内容にご記入の上、庭文庫 niwabunko@gmail.com までご連絡ください。

視察料金に関しては、当日お持ちいただくか、後日お振込みでお支払いください。（振込手数料はご負担ください。）

- ・お名前
- ・所属
- ・お電話番号
- ・メールアドレス
- ・参加人数
- ・視察希望日時（複数日あげていただけると幸いです）
- ・その他ご質問・ご要望など（請求書などが必要な場合もこちらにお伝えください。）

お問い合わせ

庭文庫 百瀬実希

niwabunko@gmail.com

080-4113-4790

〒509-7207 岐阜県恵那市笠置町河合1 4 6 2-3

メディア掲載

○TV

- ・ ケーブルテレビアミックスコム「スター列伝」 （2018 年 5 月 14 日～2018 年 6 月放送）
- ・ NHK「まるっと！ぎふ」 （2018 年 5 月 21 日放送）
- ・ CBC 放送「イッポウ」 （2018 年 5 月 30 日放送）
- ・ テレビ朝日「ニッポンの秘境！スター野宿度！！」 （2018 年 7 月 8 日放送）

○雑誌・フリーペーパー、ウェブマガジンなど

- ・ 西濃印刷「aun 第 68 号」 （2018 年 3 月 25 日発行）
- ・ WEB マガジン 70seeds「客が掃除に来る「古本屋」 小さな街で人が集まる理由をつくる」

<https://www.70seeds.jp/niwabunko-366/>

- ・ マガジンハウス「&プレミアム」 （2018 年 7 月 20 日発行）

○新聞

- ・ 2017 年 7 月 21 日 岐阜新聞東濃版
- ・ 2017 年 10 月 29 日 読売新聞岐阜県版
- ・ 2017 年 4 月 共同通信社文化面（全国各紙）
- ・ 2018 年 6 月 4 日 毎日新聞岐阜県版一面

岐阜まちなか再発見フリーマガジン

aun
「あうん」

68th Issue
SPRING 2018

2018年3月25日発行 (年4回発行)

読者プレゼント多数!!

それぞれの移住スタイル
岐阜に暮らすということ。

ACTIVE G & Gifu City Tower43

アクティブG

暮らしを丁寧に

岐阜シティ・タワー43

特別な日を彩ると 美味しいグルメ

aun Recommend Shop

大衆食堂 大島亭

テイクアウト&デリバリー BLITZ coffe

ポピンヘッド

a un selection

岐阜まちなか中華メシ

a-un WEB マガジン

<http://aun-web.com>

take free [無料]

撮影協力: 庭文庫

岐阜県
恵那市



「移住後の支援にさらに力を入れていきたい」と語るのは、移住者を支援する「恵那暮らしサポートセンター」職員の中田実希さん(26)＝恵

恵那への移住者支援

那市大井町＝。

沖縄県出身。昨秋、恵那市の地域おこし協力隊員として着任した。自分も移住者という視点を生かし、同市への移住を考える人の相談や空き家の紹介業務などのセンターの仕事に取り組む。

3年の任期後は同市に定住する予定。本好きが高じて古本店「庭文庫」を創業し、市内外のイベントに出店している。地域の魅力を見つめながら「自分なりに定住を模索したい」と意気込む。

夢は泊まれる古本屋

中田 実希さん 27

恵那市移住定住
コンシェルジュ



那覇市生まれ。休日には最近始めた藍染め教室に通ったり、草木染を行ったりするが、「子どもの頃から好きだった読書で過ごすことが多い」。志村ふくみさんらのエッセーが好き。お気に入り日は日本画家東山魁夷のエッセーで、「絵もいいけれど、言葉もすごくすてき」という。

恵那市の「地域おこし協力隊員」として2016年10月に採用され、市外からの移住希望者に対し、空き家バンクに登録された物件をあっせんする仕事などを担当。8月29日からは、恵那駅近くにおい

ぶんした「恵那暮らしビジネスサポートセンター」で、移住、定住の相談員（コンシェルジュ）を務める。まだ開設されたばかりだが、「移住、定住のためには、職場を見つけることも大事。

びゅ〜まん 岐阜

返る。移住して半年間、何をするか考えた。たどり着いたのが、「田舎で古本屋を始めること」。「ベストセラー以外の本に出合える場がない。田舎の庭を開放して、多くの人が

あられる相談に応じることが出来るセンターを、少しでも充実させていきたい」と意気込む。自身も東京からの移住者。大阪の大学を卒業後、東京で講演会を企画するイベント会社に就職した。「仕事は楽しかったけれど、あまりに多い人に疲れ果て」、16年3月、恋人の住む隣の中津川市に移り住んだ。

小さい頃から読書が好きだった。4人きょうだいの一番上。「いい子でいなきゃ、という気持ちから逃れるために、読書に没頭していました。大げさかもしれませんが、本がなくては生きていけない、ぐらいの思いでした」と振り返る。

本に出合える場所を作りたい。だが、見ず知らずの土地で、人脈もお金もなかった。そんな時に協力隊員募集を知り、「仕事をしながら、自分の住む家探しもできる」と応募。面接では「空き家バンクの調査をしながら、古本屋ができる物件を探すことが応募の目的」と正直に打ち明け、採用された。

何件か空き家をあっせんした。空き家バンクで求めている家を見つけ、定住に至った時はうれしかったが、地域のひとなじみず、出ていったケースもあり、移住、定住の難しさも知った。

協力隊員の任期は19年3月まで。それまでに、自分が納得のいく家を探すのが目的だ。今年1月には、出張古本屋「庭文庫」を始めた。月に1、2回、イベントなどで古本を販売する。「将来は、老若男女が本との出会いに胸をときめかす場所作りをしたい。泊まれる古本屋が究極の目標」と目を輝かせた。

（松原輝明）



仮装してイベントを楽しむ児童

通じたので楽しく遊べまし

心に牡蠣やフランス料理、

三番街通商をPRする関係者
（中津川市の市観光センターで）

姫さん扮
中京学院
0人のお
練り歩く
祝日に年
人をもと
ジーも
日）では
平餅、1
コけ、ら
相葉子が

若者2人 岐阜にオープン



「庭文庫」で。中田さん(左)と百瀬さん

田舎に古書店 文化の扉

消費社会が成熟すると、人々の欲望は、少しでも新しいものに向かって猛進する。当然、経済規模が大きい都市部には新しいものが集まるため、多感な若者が吸い寄せられる。では田舎には新しいものはない？ 「いや、何もかもある」と話す若者2人。岐阜県恵那市にいます。市内唯一の古書人が岐阜県恵那市にいます。市内唯一の古書店を始めた2人を訪ねた。(川村敦=共同)



飛行機、田んぼ、溪谷平地に並べられたソーラーパネル。名古屋から、窓の大きな長野行きの特急電車に乗り40分。だんだん景色は、都会のそれと違ってくる。JR恵那駅の改札口で迎えてくれたのが、古



築100年以上の古民家を改装した古書店「庭文庫」の外観

自然の中で自由に読んで

書店「庭文庫」を運営する百瀬雄太さん(30)と中田実希さん(28)だ。ここから車で15分ほど走ったところに、庭文庫はある。築100年以上の古民家を改装した店舗。そばではツバキやスイセンが咲き誇る。新緑が美しいユズの木立の先に、雄大な木曾川が緩やかに流れる。1階は3千冊以上の本。2階は春秋、宿泊施設としてオープンす

る。畳の上で本を読み、いつ来てもいいし、いつ帰ってもいい、というのがコンセプト。百瀬さんは「ただここに『本』があることが、ここにいる意味がない。せつなく来てもいいから、例えば風で揺れる草木を見つめる時間を過ごし、日が落ちて少し空気が冷たくなるのを、肌で感じてもらうことが重要」と語る。確かに、

も違つようだ。恵那市出身の百瀬さんと、那覇市出身の中田さんは、大学卒業後、東京で会社員として働いていた。2人とも、都会の「文化的なもの」に憧れを持っていったという。しかし閉塞感に嫌気が差した百瀬さんが帰郷。中田さん呼び寄せた。なぜ古書店なのか。恵那市の人口は約5万人。新刊書店はいくつかあるが「ベストセラーの本ばかり。新刊書店で買えなくても、新旧の良い本があることを知ってほしかった」(中田さん)。

書店調査会社アルメディアによると、全国の新刊書店数は2000年以降、約42%減少。出版取次大手トイハンによると、書店のない市町村も昨年7月時点で全国420に上る。自分にフィットする本と出会えないのは、恵那市だけが直面する問題ではない。「田舎には自然しかない、といわれます」と百瀬さん。「じゃあ田舎に文化的なものがない」。ただ、本は買

「本の物語」次につなぐ

【中田実希さん】
 恵那市笠置町河合で、古民家を改装した古本屋「庭文庫」は、美しい木曾川を見下ろす絶好の場所にある。中田実希さん(27)は2016年に東京から移住し、今年4月から店をオープンした。築100年以上という歴史を感じさせる落ち着いた空間には、3000冊を超える本が並ぶ。この店は、地元の人々が「また本を持ってきたよ」と、本を譲るために立ち寄る交流の場になりつつある。【横田伸治】

中田さんは大学卒業後、14年から東京のイベント企画会社で2年間勤務した。仕事にはやりがいがあったが、満員電車で揺られる都会の日々に疲れを感じつつあった。そんな中、現在の婚約者であり、「庭文庫」を共同で経営する百瀬雄太さん(30)と出会った。百瀬さんは恵那市出身。中田さんと同様、都会に疲れ、仕事を辞めて地元へ戻った。1年後の16年、中田さんも百瀬さんの実家に転

あつせんする仕事に就いた。休日には「とりあえず店舗が無くてもいい」と出張古本屋を始め、地域のイベントなどに出品。手探りで古本屋経営のノウハウを徐々に身に付けていった。そのうち、地元の人から「うちにも本があるよ」と声をかけ

「庭文庫」店主 中田実希さん(27)



「庭文庫」店主の中田実希さん。恵那市笠置町河合で

てもらえようになっ年12月、「古民家おそ

うじ会」と題して参加者を募集すると、市内外から約20人が集まった。「できるだけこの家にあった物を生かしたい」と残されていた古タンスを利用して本棚を作り、ついに4月28日、「庭文庫」はオープンした。

なかだ・みき
 那覇市出身。「知らない町は楽しい」と、高校卒業後は大阪の大学に進学し、東京で就職後、恵那市に移住。「庭文庫」営業時間は金曜～月曜の午前10時～午後5時。問い合わせは庭文庫のホームページ (<http://niwabunko.com>) へ。

現在の在庫は、小説や詩、雑誌、漫画など3000冊以上。本を譲ってくれた地元の人

と、さまざまなイベントも企画中だ。平

明るい笑顔と話し方、印象的

